

# 喜界島を訪ねて

濱田國義

「帰郷のついでに喜界島の岩倉君を見て来る様に」との先生の御言葉だつたので八月十九日宇検の人々に別れを告げた私は喜界に岩倉さんを訪問すべく二十一日午前十一時名瀬発、五島丸（八〇噸）船上の人となる。同じ郡内でありながら二十余年間の田舎生活に於て唯の一度も行き得なかつた憧れの島を、かうした機会に見る事が出来ると思へば嬉しかつた。時化模様の海上に苦しい船たびの四五時間が過ぎて四時半頃喜界島へ着く。船の着いた湾と岩倉さんの阿伝とは三里も離れて居たが、昨日の電報で岩倉さんは助手一名を連れてわざわざ昨夜泊りがけで出迎へに来て居られた。アチツクに居られる頃から皆が心配して居た岩倉さんの身体は丸で見違へるほど健康になり真黒に焼けた皮膚の色など流石にその活躍振りが察せられ、「島へ来てからは精力があり過ぎて困る」との話でも非常な心強さを覚えた。

改めて助手の拵嘉一郎君にも紹介され、五時間半白動車で一路阿伝へ急ぐ。内地の何処にも見られない県道とは名のみの道路に車を走らすのは此上ない苦痛であつた。それでも県道もない自動車もない宇検方面とすれば、どんなに喜界島が進んで居るかが判った。途中野飼の馬の数多き事と甘蔗畑の多い事、山の形の一寸風変りな点などは殊に気を引かれた。

阿伝へは夕方六時半頃、喜界島一帯に凄惨な夕立ちの降りしきる頃ついた。早速、自称アチツクミュージアム喜界島出張所たる氏の宅へ落ち付く。

夜は静寂なる孤島の地に俊寛僧都初め島流しにされた古人達の昔を偲びつつ岩倉さんと積るアチツク話と喜界島の話に花を咲かせて時の立つのも忘れて語り合つた。

いろいろの調査も予定通り進行するし農業日記や食物日記を書いて居る人々も熱心にやつて居るとの事だつた。この九月からは島の年中行事も頻りに催されるし又いよいよ一ケ年間の縮くくりをする大切な時期にも入つて来るから有らん限りの精力を集中してすべてに大馬力をかけてやつて見ると云ふことも話された。翌日は朝から阿伝の部落を見廻り二十三日は切なる引止めを断つて大島へ帰つて来た。翌二十四日から喜界島は台風襲はれたのであつた。

（「アチツクマンスリー」第十五号一九三六年九月十五日刊 所収）